

木村 穎三（きむら・えいぞう）

1、プロフィール

歌人。「鬱金香」「国民文学」「短歌表現」「弘前短歌会雑誌」等に作品を発表するなど活躍したが、29歳の若さでその生涯を終えた。

<生没>

1906(明治39)年10月18日～1934(昭和9)年10月27日

<代表作>

歌集『木村穎三遺稿集』『第一の墓標』

<青森との関わり>

弘前市和徳町に生まれる。一時期家業の質商に従事、県内の文芸誌、歌誌に作品を発表した。

2、作家解説

明治39年10月18日、弘前市和徳町82番地、質商木村永吉の長男として誕生。大正11年に短歌を作りはじめ、成田憲三の「鬱金香」、窪田空穂の「国民文学」に発表していたが、昭和2年ごろから、プロレタリア文学に関心を持ち、短歌の世界では、定型から口語歌へと移り、さらにプロレタリア短歌から芸術派に変わり、津軽照子の「短歌表現」に入社した。また葵村明夫のペンネームで「弘前短歌会雑誌」に定型短歌を発表するなど、理念と実践の動揺がつづいた。昭和9年1月より病の床に就き、10月27日永眠。享年29歳。没後の9年12月に、成田憲三が編集した『木村穎三遺稿集』が父永吉の名で発行され、昭和4年に小型原稿用紙に浄書した家集『第一の墓標』もそれに収められた。

代表作

梅の花色あせにける雨上り下土ほのかにかぐはしきかも
蛍かご柱に下げて灯を消しぬあな光るも一つ一つに

3、資料紹介

○歌集『木村穎三遺稿集』

図書

1934(昭和9)年 12 月 15 日

195mm × 135mm

「私が若し今後歌作することがあっても、既成短歌のもつ内容、形式を全然揚棄して新しい時代の短歌誕生を目ざして進んで行くであろう」と序文を書いた家集『第一の墓標』の作品(218 首)、家集『青の生理』(130 首)、「病床ノートより」(82 首)が収められている。